
由緒正しき家系の騎士が、王宮からリストラされて、よりによってのサラリーマン？

上村華月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

由緒正しき家系の騎士が、王宮からリストラされて、よりよつてのサラリーマン？

【Nコード】

N4543Y

【作者名】

上村華月

【あらすじ】

パンテゴジュファ西岸の聖都を守る由緒正しき家系の騎士が、王宮からリストラされて、強烈なフィアンセと共に新たに生きる道を探すことになった。平和な社会で騎士の価値などないものへと変わりつつある中、騎士はまず自分の存在意義から考え直す必要に迫られる。衝撃の事件を乗り越えて、最終的に就いた仕事とは？
読んでいただければ嬉しいです。

突然の解雇通告

パンテゴジユファの西岸にある聖都は今日も安泰だ。人びとは農作業に精を出し、豊かな実りを称えそして感謝する。

ここ50年は魔物や敵国も襲って来てはいないらしい。

ロツケは先祖代々、由緒正しき騎士の家系に生まれた。祖父は50年前聖都を最後に襲った魔物のボス、ポギーを倒したとされ、王宮のエントランスに銅像が祭られているほどの名家だ。

そんな血を引くロツケも今年で25歳。来月ヨガスクールの講師を務めるマスラーという娘と結婚の予定がある。

騎士といっても普段は稽古場で汗を流す。

今日は水曜日。よって朝から人ほどの大きさのわら人形を切りつける練習を行っている。

2、3体メッタ切りにし終わった頃だろうか、突然騎士団の団長から王宮に来るように呼び出しを受けた。

ロツケは王宮に行く機会などめつたにないため、一度家に戻り、最近新調したばかりの鎧を身にまとい向かうことにした。

腰には祖父がポギーをしとめた時に使ったとされる名剣「ハヤブサ」を携えた。

家から王宮までは歩いて30分はある。道中右足と右手が同時に前になるたび、由緒正しき騎士たるもの、情けないと思ってしまうほ

どの気構えだ。

というわけで、団長室の前に到着したときは自分で多少の気疲れを感じていた。

そして、ロツケは不慣れな緊張と適度な疲労を緊迫感に変え、勢い良く部屋の戸をたたいた。

「団長失礼します。ロツケ参りました。」

団長は快く部屋に招き入れてくれた。

そして応接セットにロツケを着席させるとお茶を出してくれた。

お茶菓子などもつまみながら、談笑した後、話は本題に入った。

「ロツケ君、いづらいんだけど、君は明日から来なくて良くなつたから。」

ロツケは突拍子もない話に困惑している。

「団長、明日は木曜日なので馬に乗る稽古があるんですが、中止になったということです・・・か？というか意味が・・・あの、ちょっと分からないんですが・・・。」

「いや、最近聖都は平和そのものだろ。だから先ほど国王から公告が出て、騎士団の予算が大幅に削られることになつたんだ。」

それで君に声をかけたというわけだ。ただ退職金の方は、国都合退職になるから掛け率は自己都合退職時より厚くなると思う・・・。但し在籍期間は3年だけだからな・・・総額は多少少ないかもしれないけど、勘弁してくれたまえ。」

「すみません団長、いきなり退職金がどうだとか・・・そんなこと言われても困るんですが。」

「私に困ると言われても困るよ。」

ましてや私を説得したとしても、ロツケの解雇通告が取り消されることはないぞ。なぜならってこれは国王が決めたことだからな。」

「団長、僕には来月結婚の予定があること知ってますよね？この時期にちよつとヒドイというか、正直かなり辛いんですが。」

「結婚式には、君さえよければ私も是非参加するよ。」

「僕の結婚式に参加してくれるってことは、僕の功績を認めてくれるってことですよ？なのになんでリストラなんですか？」

ロツケは団長に迫った。というか腹が立ってきた。

「おつと、いやいや参った。これは失言だった。」

ロツケの結婚式に参加すると、ロツケの功績を認めたことになりかねないな。後々労働争議とかは面倒だからな。

優秀な社員をリストラした理由なんて、法廷で聞かれても答えようが無いからな。不当解雇とみなされて危うく余計な賠償金を払うところだったよ。悪いなロツケ。俺は結婚式には行かないぞ。」

「団長、そんな言い方ないですよ。」

すると団長は突然自分の財布から3万円を取り出しロツケに手渡した。

「ほら、とつとけロツケ。これは俺個人の祝い金だ。」

「リストラされる人に祝い金なんて人を馬鹿にするのもいい加減に……。」

ロツケの顔はみるみる赤くなっていく。

「おい落ち着けロツケ、これはお前の結婚祝いだ。」

「・・・」

団長は言った。

「これは俺が決めたことじゃないんだ。分かってくれとしか言えないんだ。就業規則にもあるだろ」「国の都合で解雇する場合もあるが、その際騎士は国の判断を受け入れなければならないものとする」「つてな。」

その後ロツケは人事科に顔を出し、退職の手続きと、わずかな退職金を手に王宮を去った。
あっけないものだった。

フィアンセ

ロツケと婚約者のマスラーは、入籍前ではあるが既に同棲をしている。

二人はレンガ造りの5階建て賃貸アパートの3階に住んでいる。40?と狭いが、二人はとりわけ夕暮れ時に窓から見える王宮の荘厳な様がとても気に入っていた。

「おかえりロツケ。」

マスラーはリビングでヨガをやっていたようだが、ロツケが帰るとおかえりのキスをしてきた。

「ねえ、ロツケ。今日は王宮で何したの?なんかいいこと、それとも悪いことだったりしちゃうの?」

ロツケは新調したばかりの鎧と名剣「ハヤブサ」を洋服ダンスにしまつと、つつむき加減で話し始めた。

「はあ、俺リストラされてさ・・・。」

一連を話し終わるとマスラーは、一言。

「世知辛い世の中だね。」

そういつて、再びヨガを始めた。

しばらくして、マスラーはロツケにさらっと聞いた。

「で、どうすんの明日から仕事？」

「いやっ、何も・・・まだ・・・」

「ちよつとロツケ、お願い。聞いて！」

最近白菜とかの野菜価格が高騰してるって知ってるでしょ？豚肉とかも去年の一点何倍とかなってるの。普段ロツケは騎士のプライドだとかなんだかで市場行かないからわかんないと思うけどさ・・・主婦が余計に使えるお金ってほんとどこの家庭も減ってるの。みんな生活を切り詰めて、少しでもいいものを家族に食べさせたいって、そんな風に考えてるってわかるよね？

だからヨガスクールに来る生徒さんも最近は減ってきてるの。」

ロツケは付き合ってから始めてマスラーから強い態度でモノを言われた。騎士時代にはなかったことだけに戸惑いを隠せない。

「生徒さん減ってるんだね？」

「何のんきなこと言ってるの？私達来月結婚式でしょ。式でいくらかかるか位はロツケにも分かるでしょ？」

「300万円だろ。それは俺も知ってるよ。けど、もう前金も振り込んであるし、」

「違うの。もうう、ロツケってば全然分かってないよねほんとそういうとこ。その後の話なの。」

けどもうあなたフリーターなのよ。なんなのもう。」

ロツケは反論した。

「それは確かにフリーターだよ、明日からの俺はね。けど、騎士だったから俺と結婚したって、まるで俺の中身なんてどうでもいいみ

「たいな、それってヒド過ぎじゃないか？」

「そこまで言っていないでしょ。ロツケのバカ。さっさと仕事を見つけて働けて事！」

ロツケはもうどうでも良くなりかけると同時に、イライラが治まらない。押さえるのが必至で、もうほんとイライラしている。

すると突然マスラーはジャージを着替えて、床に座って動かないロツケの手をひっぱり上げた。

「行くよバカ！」

バカなんて今日までマスラーから言われた事など当然ない。しかしロツケはマスラーの顔を見るなり、本気度を悟った。

「行ってくてどこにだよ？」

「警備会社。」

そして二人は聖都の反対側にある警備会社に向かった。その間二人は無言だった。

仕事探し

二人は夕刻頃にようやく警備会社に到着した。

そしてマスラーは受付の女性に問いかけた。

「すみません。仕事を探しているんですが・・・。」

「あの、ガードマンの仕事ですか、それとも経理とか内勤ですか？」

マスラーはロッケに対し、しばらくぶりに口を開いた。

「ちよつと、ロッケ何出来るのあんた？」

「ガードマンって俺そんなのあんまりんだけど、ってかまだ気持ちの整理も」

受付の女性は

「ガードマンの仕事でしたら先ほど内定の方が5名程出まして、すみませんが欠員はないんです。というのもどうも王宮の騎士の方が多数リストラに合われたとかで・・・。」

マスラーは丁寧に受付の女性にお礼をし、事務所の外にロッケを連れ出した。

「ほらっ、みんな考えていることは同じなの。わかる？騎士だったとかそんなの関係ないの、平和な世の中で何が騎士なのよ、まったく。みんな生活のために騎士をやったの。なのにロッケは・・・ぶつぶつ。」

ロッケは何をマスラーに話せばいいのかがさっぱり分からなくなつた。

自分の気持ちにそもそもその整理が出来ていないからだ。

由緒正しき騎士の家系の血を受け継ぐ者として、自分に誇りを感じ、
国に忠誠を尽くしてきた。そして忠誠が不要とされ、過去の栄光す
らないがしろにされているこの状況だ。

マスラーは言った。

「ほらっ、帰るよ。」

少しマスラーの言い方がさっきよりやさしくなったような気がする。
仕事がないと分かって少し冷静にならなければと感じたのかもしれない。

そして「今日からうちは毎晩お粥だから。」と言う、家路につくマ
スラーの目からは強い覚悟が伺えた。

一族への謝罪

翌日、ロツケとマスラーは朝から郊外に住むロツケの父親の元を訪ねた。

そして一通りの挨拶を終え、広い暖炉のあるリビングで、ロツケから父親に、事件の始終を話した。

父親は立ち上がり、激高した。

「騎士とし生まれたるもの、辞めることは許されぬことだ。」

「違つんです、お父さん、辞めさせられてしまったんです。ロツケは頑張ってました。」

マスラーはロツケをかばうように言うと、父親は

「それは分かっておる。私が憤っているのは国王にだ。今まで我々が行ってきた栄光を無にするような、ひどい仕打ち以外の何者でもない。冒涇に値する。」

マスラーは興奮する父親を落ち着けようと「ちよつとお父さん、冒涇だなんて。」

「よそ者は黙っておれ。これは私たちの血の問題だ。」

「バシツ・・・」

嫌な音が部屋に響いた。父親はマスラーを平手打ちした。

マスラーは目を赤く晴らし、倒れこむ。

「おい、親父。お前やっていいこととだめなこと位わかんねーのか

よ。ふざけんな、何が騎士だよ。なにが血だよ。俺の大切な人すら守れねーのかよ。かつこ悪いんだよ！」
ロツケは屈んでマスラーを抱え込みながら叫び、そして父親を睨みつけた。

父親の罵声は止まらない。

「おいロツケ、俺はお前をそんな風に育てた覚えはない。ましてやリストラされるとは、情けないにもほどがある。ふざけんな。バカヤロー！！！」

あたりの壁や家具に当たりつくす。

そして、「お前など死んでしまえ！俺は死ぬ……。おらあー！！！」

そういつて父親は壁に飾ってあった剣を取り、自らの腹に突き立てた。

「いやー。」マスラーは叫ぶ。

父親は何度も自分を突き刺す。

あたりは血の海へと変わっていく……。

ロツケにも、もつどうすることも出来ない。目の前で起きる惨劇に、必至にマスラーの目を覆うことしか出来ない。

剣は相当回突き刺さった。

そして父親は怒りの形相でロツケをにらみ、地面に倒れた。

・・・父親は即死だった。

二人は現場で簡単に警察の事情聴取を終えた。

というか何も話せていなければ、何を聞かれたかも覚えていない。

ロツケに抱きかかえられるマスラーの目はどこかを見ている。

そして両腕で自分の体を抱え込み、小刻みに震えていた。

あまりに突然のことだった。

そしてマスラーは病院に収容された。

病床のフィアンセへ

あれから2ヶ月が過ぎた。ロツケは今日も病院に來ている。

病床に横たわるマスラーには、未だに何を話しても返事は返っていない。そしてぶら下がる天敵の瓶よりもずっと遠くを眺めている。

「なあ、マスラー。騎士だからといって、自分の命を捨てるほど愚かなことってないよね。俺が大切にしていた騎士のプライドなんてさ、そんなもんだったんだよね。きつとさ。」

マスラーは気付いてたよね？

リストラされたときだってさ、必至に一緒になって現実に連れ戻そうとしてくれたしさ。俺のこんなプライドかつこ悪いだけって知ってたよね？

けど敢えて何も言わなかった。騎士は俺そのものだから。今まで騎士として生きてきたから。

それでもこんな俺と婚約してくれたこと考えると、マスラーは騎士としての俺じゃなくて、俺そのものを愛してくれてたのかな？

ちょっと都合のいい解釈だったりしてね。

なんかさ、事件以降、自分が騎士の家系のプライドを絶やしたことなくって、何も悪いと思わなくなっただ。親父に謝りにいくまでは、ほんとどうしたらいいのかさっぱりわかんなかったんだけどね。

リストラされた日にさ、多分マスターに無理やり仕事探しに連れて行かれなければ、俺もひよっとしたら親父みたいなことってか、別に死んだりはしないと思うけど、いつまでも騎士たるものみたいなことばっか言ってたんじゃないかなって考えたりするんだ。

けど、生まれてから今まで自分が守り通した騎士としてのプライドって、こんな一瞬で無くなるんだって思ってたさ。

今までの俺ってなんだったんだろうって……。

大切に守ってきたものって、どれだけ小さく意味の無いものだったんだろうってさ。」

ロツケはうつむき、そして泣いた。

窓からはそびえ立つ王宮が見える。

30分ほど経っただろうか。

「じゃ、俺会社行ってくるね。ほら課長にまた怒られちゃうからさ。お前はほんと何にも出来ないバカだなんてさ。ほんとにウザいんだよ。いやこれマジで……。

けど、仕事は頑張るよ。白菜どころか最近魚も値上がりしてて、結構きついよな、生活がさ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4543y/>

由緒正しき家系の騎士が、王宮からリストラされて、よりよってのサラリー

2011年11月12日17時24分発行